

入門セミナー実施に関する事例報告Ⅱ

青 嶋 由美子
岡 本 雅 子

I はじめに

本学幼児教育・保育科では平成14年度4月期より、『入門セミナー』という科目を開講してきた。これは、卒業必修科目としての位置付けを持ち、入学期における学生のサポートに重点を置くための科目として設定されたものである。開講当初の狙いとしては、大きく三つのものが想定されていた。まず、新しい友人関係の構築がスムーズに行くようにというもの、第二に保育者になろうとする学生達に不足している生活技術を伝えたり、興味・関心の幅を広げさせたりしたいとするもの、そして第三に読書体験を充実させるというものであった。

開講当初は学生数の関係から18～19人というセミナー単位での人数であったが、今年度は20～21人で一つのセミナーを構成することとなった。幼児教育・保育科の一般的な講義受講単位は、通常、1クラス単位での40人前後から1クラス半単位での65人前後である。このような人数にあっては、教員と学生との密な人間関係は構築し難く、また、学生同士も個人としてクラスメートを認識し辛いという考えから、寺子屋方式の少人数制度でのセミナーに踏み切ったという経緯もある。少人数でのセミ

ナーは、教員が学生の資質を把握しやすくなり、学生側からも教員側への踏み込みが行いやすくだろうと予想されたためである。一人一人の学生の生活状況・生育環境の把握を通し、教員サイドからの木目細やかな助言や指導を行えるであろうと考えた。入学前の18年間にわたる生活習慣が僅か半期間の講義で変えられるはずがないという反対意見もあった。しかし、何もしないで手をこまねいているよりは、何らかのリアクションを期待して行動に移すべきだと考える教員の声を通ったのである。

また本学科では『入門セミナー』開講前の数年間、友人関係をめぐるトラブルが目立っていた。そのトラブルを苦にして退学を希望する者も各年度に数名ずつ出ている。保育所・幼稚園から始まる「他者との関わり」に馴染めないまま、大学にまで進学してくる者は、ますます増加してきているのだと実感させられるような状況にあったのである。年長者や教師との上下関係に反発を覚える感覚を抱いたまま成長してきた、敬語を全く使用出来ない者や、傷つけられるのが、また、傷つけるのが怖いために、言いたい事も言えぬ者が多くなってきていた。表面的な付き合いは上手だが、それ以上には踏み込む事を良しとしない付き合い方や、お互いに褒めることはするのだ

が、批評する事のない友人関係が当たり前の世代、逆に他人をとことん貶めてようやく自分の精神の安寧を得られるといった状態の学生を受け入れていたのである。教員に対して胸襟を開けない学生も目立っていた。さらに、問題となっていたのが、入学してからの一ヶ月程の間に、友人が作れない場合、それがために退学したいと申し出る学生の存在であった。

上述のような状況を鑑み、『入門セミナー』が果たす役割は大きなものとなるだろうと考えていたのである。携帯電話を代表とするツールに頼りがちな友人関係を構築する現代の学生に、人にはそれぞれの表情と音声があることを改めて理解させ、それを通してクラスメートを認識する機会を増加させたいと期待していた。幼児教育・保育科では、卒業生のほとんどが何らかの形で人と接する仕事に就いている。対象が乳幼児であったり、高齢者であったり、障害者であったりという違いはあるものの、人間が対象であることに変わりはない。将来的にそのような職業に就く可能性が非常に高い学生に、今一度人間関係を築く基礎は何であるのかを伝えたいという強い希望があったのである。

この『入門セミナー』を開講してきた三年間を通して当初の目的が達成された部分と、思いも寄らなかった結果が生じた部分がある。本資料は、2003年度・2004年度の実施内容を明らかにした上で、その問題点を総括していくものである。

II 2003年度『入門セミナー』実施内容

この年度の『入門セミナー』で、前年度

と大きく変わった点は、科目担当者を増やしたことである。2002年度においては、3人の担当者が同じセミナーを2回ずつ繰り返す形で実施していた。この年度からは、担当者を6人に増やしてリピート無しでセミナーを行った。

第1回 ガイダンス

半期全授業分の実施計画表を配布し、それに基づき、テキスト『子どもとマスターする49の生活技術』紹介とセミナー用ノート の作り方の説明を行った。テキストの目次を利用して、生活技術修得度チェックを実施した。この過程が、現在の自分に何が出来て何が出来ないのかを学生個人個人が把握する契機となった。

第2回 学内を知る

図書館職員の協力を得て図書館利用法に関して約30分間にわたる説明を受ける。特にインターネットを利用した検索方法に重点が置かれた説明で、学生にとっては利用意欲が増す内容だった。また、入学式直後に受けていた学内案内をもう一度行う。学内の施設に慣れてきたところで、疑問点がないかという確認を行えた。意外だったのが各教員の研究室の位置が曖昧であった点である。広い範囲にわたって研究室が点在しているというのが、学生にとっては新鮮なショックだったようである。セミナーのメンバーを覚えられたかどうか、順送りゲームも行った。

第3回 新入生歓迎会（1・2年生の全員が参加）

午後1時から4時20分までという長時間にわたる歓迎会が、2年生のわいわく委員を中心に企画・運営された。2年生の卒業研究セミナー単位での出し物・授業作品発表を通して、1年生は今後の学生生活の進

め方を学んだ。後半では分散会が行われ、少人数単位で2年生から試験や実習について教わった。先輩からの励ましや助言を受けて、心強さを感じた学生が多かった。

第4回 危機管理①

こんな時にはどうすれば良い？（2003年度に新たに加えた内容）

これは前年度の『入門セミナー』には含まれなかった内容である。前年度多発した学内での盗難事件を受けて、学生の危機意識を高める目的で新たに加えた。様々な事故や事件に遭遇した際の心構えを学び、緊急連絡先の確認を行った。

第5回 日常の基礎技能修得①

（2003年度は前年度と内容を変更）

前年度に引き続き、箸使いについての確認を行う。これは、将来、子どもの前に立つ職業に就く学生にとっては絶対に必要な技能であるため、セミナーの内容からは外せないものである。変更点は、昨年度の「糸巻きタンク」作りをやめたことである。これは担当者が替わったために指導出来る者が居なくなったという教員サイドの理由による。「糸巻きタンク」の製作ではカッターナイフの使用法を学んだ。今回も技能としては同一のものを確認したいということから、消しゴムを利用したスタンプ作りを実施した。

第6回 危機管理②

震災の時にどうする？（2003年度に新たに加えた内容）

予想される東海大地震発生に如何に心構えをするかを学ぶ。本学所在地は、大きな被害が想定される地域であるため、特に学生の意識を高めたいと思い、セミナー内容に加えた。豊橋消防本部防災対策課に依頼し、「東海大地震について・地震対策・地

震に備える」という3項目を柱とする講義をしてもらった。起震車に乗せてもらい、関東大震災、阪神・淡路大地震の際の揺れを、学生全員に体験させた。さらに各セミナー毎に、大地震に備えて家庭で行うべき対策の確認作業を行った。

第7回 行事への参加①

——基本的な技能を応用して——

秋に開催される学園祭への準備作業を行う。基本的な技能の修得と、大きな行事への準備を兼ねる内容として実施した。

第8回 本を読む・新聞を読む

学生から教員・友人への推薦したい本を発表する機会を設けた。プレゼンテーションの基礎的な内容として実施した。学生が挙げてきた本については別表に記載しておいた。学生達が周りの人に勧めたい本として挙げるものには、現代の学生らしいものや科の特性を示すものが含まれており、興味深い。さらに、二年後には社会人として巣立つ者として、新聞に接する機会を増やして欲しいと考え、前年度に引き続き、新聞についての講義も実施した。これは、新聞の種類や見出し・小見出し・リードの利用法を確認すると共に、自分が選んだ記事の整理を実際に行った。

第9回 行事への参加②

——大きな行事の準備をする——

学園祭へのセミナー参加の方針を決定する機会とした。これは、各セミナー毎に学園祭で来場する子どもとどのような形で関わるかを定める大切な話し合いの場となった。さらに、学園祭用のポスターを準備した。

第10回 保育者となる立場で介護福祉を学ぶ

本学には卒業後1年間で介護福祉士の資

格を取得出来る専攻科がある。専攻科専用の実習室を利用して、資格取得のための学習を一部体験すると同時に、福祉の心についてのレクチャーを受ける機会とした。

第11回 公共施設の利用法を学ぶ ——プラネタリウム研修——

社会に出た後、子ども達を引率して行く可能性が高いプラネタリウムを研修場所として、公共施設利用のマナーを学んだ。これには目的地までの交通機関や所用時間を自ら確認して行くという形態で実施した。また、研修に先立ち、学生には「七夕伝説」と「夏の星座」にまつわる物語を一つ纏めておくようというレポートも課した。

第12回 日常の基礎技能修得②

実習前に身に付けたいマナー

学生が実習先で恥をかかないための基礎的なマナーを修得させる機会とした。「会釈・目礼」「普通のお辞儀」「深いお辞儀」といったお辞儀のTPO、紹介するときの順序、席次のTPO、椅子への腰掛け方、お茶の出し方・いただき方、畳の歩き方等、普段何気なく行ってしまいがちな動作の意味を確認し、実際に行ってみて正しいやり方を体験させた。

第13回 まとめとして

半期間の講義で学習した内容のまとめを行った。また、定期試験を控えているため受験上の諸注意を確認した。さらに、夏季休暇中の連絡先・連絡方法を担任・学生の双方で確認する機会とした。夏季休暇の過ごし方によっては、秋学期に退学を希望する者が出るため気軽に教員に相談出来る雰囲気を作れるように心掛けた。

Ⅲ 2004年度『入門セミナー』実施内容

第1回 公共施設の利用法を学ぶ（2003年度と内容を変更）

従来この内容の回は、講義も半ばまで進み、セミナー構成メンバー同士の意志疎通が容易になった時点での実施となっていた。しかし、この年度は、全国を巡回している「世界のバリアフリー絵本展」（日本国際児童評議会・日本ユニセフ協会主催）の豊橋市内会場開催時期に合わせて、初回に実施することとなった。この絵本展は、愛知県内では、豊橋市だけで開催されるということもあり、担当教員全員が、是非この機会に学生を連れて行きたいということで急遽日程を変更した。会場は、豊橋市総合福祉センター「あイトピア」である。今回は「あイトピア」の担当者が施設内の説明に立ってくれ、新しい福祉施設の内容について、学生が知識を深められる非常に有意義な回となった。

第2回 ガイダンス

内容的には昨年度とほぼ同じ形での実施であった。半期全授業分の実施計画表の配付、テキスト『子どもとマスターする49の生活技術』紹介とセミナー用ノートの作り方の説明を行った。テキストの目次を利用しての生活技術修得度チェックも例年通り実施した。2004年度は、年間の幼児教育・保育科学生用行事計画表をこの時間に配付し、学生が学校行事優先の生活を送りやすいような配慮を年度当初に行った。セミナーのメンバーを覚えるための「順送りゲーム」も行った。

第3回 学内を知る

この回も内容的には前年度を踏襲した。図書館職員の協力を得て図書館利用法に関して約30分間にわたる説明を受ける。図書館は、新入生が年間を通じて与えられる「絵本ノート」の作成のために必要不可欠な場所である。図書館担当者もその辺りを熟知しており、まず絵本の借り出し方の説明に重点を置いてくれる。『入門セミナー』を通しての図書館利用説明もあるべき形にしっかりと定着してきたという印象がある。図書館とセミナー受講教室との往復経路を利用して、入学式直後に受けていた学内案内を再度行う。学内の施設に慣れ始めたところで、もう一度疑問点がないかという確認を行った。前年度、なかなかセミナーのメンバー全員の名前が覚えられなかったという学生からの声があったことを受け、今年度はセミナーのメンバーを覚えるためのゲームを増やした。「お名前ビンゴ」「順送りゲーム」「じゃんけん順送りゲーム」の三種類を行い、出来るだけ早く名前を覚えられるような工夫をした。

第4回 新入生歓迎会

昨年度よりも短縮時程で実施された。午後2時50分から午後5時までの時間帯で、2年生のわいわく委員会を中心に企画・運営された。時間短縮のため、昨年度のような全ての2年生セミナーの発表は行われず、エプロン・シアター、手遊び、ブラック・シアター、ダンスの四種目が新入生向けに演じられた。新入生にとって上級生の演技というのは、毎年強烈な印象を与えるものとなっている。この年度の新入生も大きな感動を覚え、次年度は自分達がこれを企画するのだという強い意欲を示す者が多かった。また、分散会では、先輩の助言を得た

ことで、様々な不安や心配がなくなったと感じた学生が多数見られた。

第5回 本を読む・新聞を読む

昨年度は1時間のうちにこの双方を実施出来たが、筆者の担当セミナーでは、今年度は時間内に「新聞を読む」内容の方しか行えなかった。そのため「本を読む」の方は、別日程で実施せざるを得ない結果となってしまった。今年度は、前年度までの内容「新聞の種類」「見出し・リード・小見出しの活用法」に加え、どの新聞が自分にとって読み易い記事となっているかを探らせた。今回は政治・宗教色の薄い新聞記事という観点から、キトラ古墳石室内を赤外線撮影して明らかになった内容を扱った記事を取り上げた。学生に配布した記事は、中日新聞・読売新聞・日本経済新聞・毎日新聞・朝日新聞のそれぞれ2004年4月15日付けのものである。これに加えて、小学校高学年から中学生向けの記事である「朝日NIEスクール・ののちゃんの自由研究」より【お墓なのに色鮮やか・キトラ古墳】も配付した。ほとんどの学生が分かり易い解説付きの「ののちゃんの自由研究」が最も自分に適しているものとして選択した。このような準備段階を経た後、社説や第1面の記事から幾つかを選んで、「5W1H」を中心とした記事内容の整理を行った。

第6回 日常の基礎技能修得①

昨年度の同一内容である「消しゴムスタンプ」作りを実施した。これは、昨年度学生からの評判が非常に良かった技能訓練であったので、今年度も繰り返しての実施となったものである。カッターナイフの正しい使い方をマスターしつつ、自分の印を作る。今年度の学生の多くは、セミナー全員の「消しゴムスタンプ」完成作品を一枚の

紙に押し合い、それぞれの名簿を作成した。教員サイドが各種のスタンプ台を準備したこともあり、カラフルなスタンプ名簿が完成した。こうした過程も、セミナー内での仲間意識を強める機会となった。

第7回 危機管理①

こんな時にはどうすれば良い？(2003年度とは内容を変更)

今年度は消費者トラブルに巻き込まれる若者が増えているという社会状況を鑑み、悪質商法について学ぶ機会とした。愛知県金融広報アドバイザーを講師に招き、現実には起きている事件を中心とした講演を行ってもらった。特定商取引に関する法律・消費者契約法を中心に、インターネットや携帯電話に絡む架空請求、未成年者契約の落とし穴、クレジットカードの管理等、自立した消費者であるために必要な知識が多岐にわたって紹介された。面白く、また、啓発的な内容は、学生にとって非常に有意義な刺激となった。

第8回 行事への参加①

——基本的な技能を応用して——

前年度と同内容にて秋に開催される学園祭への準備作業を行う。基本的な技能の修得と、学生が大きな行事へ参加するという心構えを持つ機会として捉えられるようにした。

第9回 保育者となる立場で介護福祉を学ぶ

専攻科担当者の説明を通して、介護福祉のあり方を学ぶ機会とした。障害者や高齢者のために様々な工夫をこらすことが出来る現代の介護体制の一端を知り、幅広い視野の持てる保育者を目指すという姿勢を理解出来るような内容とした。

第10回 日常の基礎技能修得②

今回初めてランチ・ミーティングという形を導入した。箸使いは一朝一夕に身に付くような技能ではなく、短い時間だけ心掛けていればそれで済んでしまうというような技能でもない。今年度は、自宅から弁当を持参し、会話をしながら楽しんでその弁当を食べる中で、正しい箸使いが食事の間中出来るかどうか確認するという場を設けた。ちらっちらっと他人の箸使いと自分のそれとを比較する者も多く、意識付けとしては十分な機会となった。また、ポイントは箸使いに置いたが、弁当の中味を考える場とした。保育者として社会に出た際、栄養のバランスが取れた日々の食事は非常に大切なものとなる。また、幼稚園に就職する場合は、毎日の弁当が必要となることが多いし、その弁当は園児の目に触れる。その時に自分の食に対する意識が問われることになる。その点からも、学生の自覚を促す良い契機となった。

第11回 行事への参加②

——大きな行事の準備をする——

セミナー毎に学園祭へどのような形で参加するのかといった方針を決定する時間とした。これは、各セミナー毎に学園祭で来場する子どもへどういった種類の遊びを提供し、どのように楽しんでもらうかを考える大切な話し合いの場となった。また、筆者の担当セミナーでは、第5回分の「本を読む」とした内容を、この回に補足として実施した。学生が、友人や教員に読んでほしいとして推薦した本については、別表にまとめてある。セミナーのメンバー同士が随分と打ち解けた時期に行ったせいか、プレゼンテーションは非常に生き生きとしたものとなり、質疑応答も活発に行われた。

第12回 危機管理②

救急手当について学ぶ

この回は実質3時間の講習が必要となったことから、補講期間や夏季休暇中に時期を移しての実施となった。豊橋中・南両消防署の御協力を得て、新入生全員に心肺蘇生法の実施訓練を行った。将来子どもと関わる現場に立つことが多い本学学生にとって、事故が起きた際の応急手当法は必須知識の一つである。今回は、『入門セミナー』という時間を利用して、応急救護についての知識を身につける体験講座とした。人口呼吸の他に、切り傷・打撲傷・脱臼・捻挫・骨折・火傷・凍傷などに、どのように対処すれば良いのかも指導を受けた。

第13回 まとめとして

短大入学後の最初の半期が終わった時点で、今後の学生生活を考える場とした。今までの学習方法の点検、春学期定期試験に向けての注意、初めての保育園実習に向けての心構え、夏季休暇の過ごし方、緊急時の連絡先確認を行った。

IV 総括

平成14年度（2002年度）より開始された『入門セミナー』も当初の実験期間と考えられた三年間が経過した。ここで、まず、科目開設の目標が達成されたかどうかを振り返ってみたい。

まず、学生の友人関係についてである。ここ三年間を通して退学者はセミナー開設以前ほどの多さには至っていない。退学する際も、人間関係の躓きではなく、適性の問題を口にして方向転換を望む学生が殆どである。勿論学生の間で友人同士でのトラブルが見られないわけではなく、退学者が

減ったからということで、学生間の人間関係がスムーズなものになったわけではない。しかし、懸念されていた「友人が出来ない＝短大を辞める」という事態はかなり防げるようになったと言える。半年間、そして一年間という期間にわたって学生の友人関係を眺めてみると、概ね入学後二ヶ月を限度として、それまでに纏まった交友関係を維持していくグループが多いようである。賑やかな子は賑やかな子同士で、また、静かで目立たない子はやはり同じようなタイプの子といった具合に、共通点が多い学生が親しくなっていく傾向が非常に強い。現一年生を見てもこの傾向は顕著であるし、セミナー内での小さな友人関係を基盤に大きなグループへと発展していったことがはっきりと分かる。『入門セミナー』開設以前の時期には、出身校が同じである学生同士での付き合いが中心であった。そして、同一の出身校の者が存在しない場合、その学生同士が友人となった場合が多かった。しかし、少人数単位での講義では、名前を覚えることも容易く、お互いを知り合うための時間（自己紹介・推薦図書を紹介・日常基礎技術訓練等）が多かったこともあって、相互理解を深め合えたようである。若干名が、このグループからはじき出される、或いは、自らが出て行くといった形で、交友関係を変化させていく。教員としては、その変化の過程を追うことも可能であったし、時宜になかったフォローを行うことも出来た。このような少人数で学生と接する教科目であったからこそ見逃さず済んだ人間関係の変化であった。教員サイドからは、担当学生の人数が少ない為に掌握がし易く、早い時期から名前で呼べ（＝君のことは、ちゃんと個人として認識して

いるよというアピールがし易い), 学生に親しみを伝えられる。学生サイドからしてみると, 個人的に話す機会が多いため, 高校時代までのようなホームルーム担任に近い意識を持ちつつ, 教員と接する事に繋がっている(短大では, 教科担任制であるため, 人数単位の大きな授業では交流を持ちにくい)。

第二に生活基本技術の伝達についてである。これには, 若干の問題が生じつつある。学生サイドの問題ではなく, 教員サイドの問題としてである。初年度, 担当教員3名の合意のもとに着手した内容であった。時間をかけて話し合い, 講義で扱う内容の細部まで論じ合った。その結果, 学生へ伝達する内容に大きな違いは発生しなかった。しかし, 昨年度・今年度と『入門セミナー』担当者は6名体制となった。教員間のこの内容に対する温度差が, そのまま学生に伝達する内容の相違となって現れたのである。特にこの生活基本技術に関する部分ではそれが顕著であった。箸使いやお辞儀の仕方, 挨拶をする際に敷居や畳の縁を踏まないといった常識的な部分を, 敢えて, 短大にまで進学してきた学生に教える必要があるのかといった見解を主張する教員も居る。たとえ短大生であろうとも, 社会人になる前に, 欠けている常識や基本的な技術を伝達すべきだと主張する教員も居る。この意識の隔たりは, そのまま学生への講義内容の差となっている。この部分を省略したセミナーもあったのである。さらに, 同じ「マナー」という言葉でくくってみても, 「道を歩いている時ゴミを見つけたら拾いましょう」と伝える教員も居れば, 応接室に通された時のソファへの腰掛け方やドアの開閉の注意を教える教員も居た。このよ

うに伝達内容の差があつては, 同一の科目名で行われる授業を受講する学生にとっての不公平が生じてしまう。セミナーで作成したノートを見てみると, 筆者が担当したセミナーの学生の多くが, 「社会常識の不足」「日常的な技術の未習熟」に気付き, 家族の協力も得て努力するようになったと記している。現代は, 昭和時代まで家庭が担ってきた役割の放棄が顕現化してきている。こういった時代にこそ, 幼児教育者・保育者を育成する場が, 生活に根ざす技術や常識を学生に伝承させねばならないと考える。伝達側に回る教員の温度差は, 出来るだけ早く解消すべき問題点だと考察する次第である。

最後に, 読書経験を増加させたい・新聞を身近なものとして捉えられるようにしたいといった「知育」に関する面である。これは, 初年度から全く向上していないと断ぜざるを得ない。友人に推薦したい図書のパレゼンテーションの場面や, 実際に自分が選んだ新聞記事のまとめをする場面では, 学生は積極的に授業に参加してくれている。紹介される図書の内容も, 所属学科の特性を示すかのように, 虐待・福祉をテーマとするものを挙げる者, 絵本を推薦する者が目立つ。しかし, それが, 自発的に継続されているかと言えば, そのような事は全くないのである。学科目の縛りがあり課題とされている場合(「絵本100冊ノート作り」「環境・ノート作り」「保育方法論・新聞課題」等)には, 絵本や新聞と取り組んではくれている。しかし, この枷が無かったならば, 学生は自ら新聞を開こうとはしないだろうし, 図書館通いの回数も激減するだろうと予想される。就職活動を前に, 新聞との取り組み方を尋ねてみると,

読んでいないと答える者が圧倒的に多い現状である。学生の意識変革にはまだまだ遠いというのが実情である。

過去三年間にわたって『入門セミナー』の講義を行い、教員の資質・人間性、学生に対する愛情の示し方、教育に携わることへの熱意といったものの大切さを痛感した。そして、これ等がそのまま、現在実施されているこの科目の問題点となっているのだと判断する。『入門セミナー』は、少人数で行われる講義である。そのため、教員と学生の関係が、その他の学科よりも前面に押し出される。これは単に相性の問題ではない。教員が学生にどういった態度で接しているかという姿勢そのものが問われる形に繋がって行く。ここを看過するようでは、円滑なセミナー運営は行えない。また、複数の教員が同一内容で同一科目を担当する場合、非常な困難を伴うのは事実である。しかし、この『入門セミナー』という科目が、新しい時代を担う幼児教育者・保育者としてふさわしい学生を世に出したいという願いから生まれた科目であることを、担当者が今一度認識し直すことが肝要なのではないだろうか。学生のために教員が何をしなくてはならないのかという意識改革が出来てこそ、同じ温度での講義を行えるのではないだろうか。担当者全員が同じ内容での講義を行えるよう、教授内容については必要な部分の精査を完全に行い、議論の末必要だと認められた内容を必ず教授する、それが出来ない担当者は講義担当者からは外れるといったステップを踏む体制を確立すべきだと考える。筆者は、所属学科変更により、来年度よりこの科目を担当しない。自ら設立に関わった科目『入門セミナー』が大きな転機点に在る現在、こ

の科目を手放すのは心残りであるが、今後の授業改善に大いに期待するものである。

（文責 青嶋）

V 評 価

幼児教育・保育科の6クラス制『入門セミナー』がスタートして3年、6人担任になって2年が過ぎた。6人担任になってからは、自分もクラス担任の一員として『入門セミナー』、『総合演習Ⅰ』に取り組んできた。そのような立場上、前回に比べて客観的視野に欠ける恐れもあるが、極力客観的に振り返り、改めて『入門セミナー』の効果、今後の入門期教育のあり方について自分の考えをまとめたいと思う。

1. 学生の把握

まず最初に、学生の把握について考える。6クラス、20人ユニットでの『入門セミナー』は、単なる科目の一つではなく、教員（セミナー担任）による学生の把握という役割を果たしてきた。少人数での様々な活動を通して、人間関係に関するトラブルや出欠席の動向が把握しやすいため、早期対応ができていくということがその一つである。これは必ずしも担任が早期発見するというわけではない。担任をはじめとする各教員が学生の把握を進めた結果、何れかの情報網の中でキャッチできたと感じている。退学者が激減し、皆無になったというわけではないが、所謂打たれ弱い学生が増え、中途退学者が増加傾向にある昨今、例年並で推移していることは評価に値するのではないだろうか。このことは前回にも述べたが、『入門セミナー』の時間が、高校までのHRの時間の役割を果たしている

ことの現れであると認識している。逆にいうと、HR的役割を果たすことのできる『入門セミナー』を通して、セミナー担任はその重要性を認識し、その時間を有効活用し、学生の把握をするべきだとも言える。

2. 教員の影響

次に、教員（セミナー担任）の影響について考えたい。これは、前回には思い及ばなかった視点であるが、ある卒業生の言葉がきっかけで今回初めて考えてみた。その卒業生の言葉とは、「(1年生、2年生のセミナー)担任の先生は、意外と影響あるのですよ」という言葉だ。自分の大学時代を振り返ると、大変申し訳ないことにセミナー担任しか思い出せなかった。学年が18人という特殊な少人数の環境にも拘らず、学年担任の先生を思い出せなかったのだ。あれこれ記憶を辿り、どうやらオリエンテーション合宿にいらっしやった先生が1年次の担任であったと思い出したが、2年次に関しては全く記憶が欠落している。このことは、授業以外での関わりがほとんどなく、担任であるという認識が乏しかったからと考えられる。逆にいうと、担任の影響もほとんどなかったと言える。では、現在の幼児教育・保育科における担任の影響とは何であるのか。

『入門セミナー』担当として特徴的なことは、『入門セミナー』の内容には、専門外の内容が多く含まれていること、そして、様々な行事に学生と共に関わる機会が多いことである。プラネタリウムや福祉施設などの学外施設見学に同行する。学園祭という学校行事に向けて、また手仕事修得の一環として、三つ編みやお土産袋製作に共に携わる。夏の保育実習前には、初めて

の実習ということで、事前の実習指導の一端を担った、等がその例である。また、『入門セミナー』の一環ではないが、『体育実技』で行ったクラスマッチにおいては、担任の先生が顔を出して応援して下さったことに対して、学生が非常に喜ぶ姿が見られた。これらのことから考えると、専門外の活動に対する我々教員の取り組み方、或いは取り組む姿が、担任の影響なのではないかと考えられる。何故ならば、『入門セミナー』の内容に関しては、担当者如何に拘らず統一されており、また我々教員の専門科目に関しては、一部の選択科目を除いては全クラスに関わるため、教員の専門性の問題ではないと考えられるからだ。(『入門セミナー』と同様にセミナー担任が担当する『総合演習Ⅰ』に関しては、担任の専門性との関わりがあるため、別途、考える機会を持ちたい。)

前述の卒業生は、担任の影響について、「学生の雰囲気に影響する」といった非常に抽象的・感覚的な言葉で説明していたが、それは単なる教員に対する好き嫌いであるとは考えられない。その理由は、1年生のセミナーは選べないが、2年生のセミナーは、多くの場合、希望する学生で構成されているからだ。従って、我々教員が如何に学生に向かい合うかという、専門性、指導内容、指導方法以前の問題、つまり、我々の教育者としての姿勢が問われているのではないかと思う。

子どもにとって、幼児期に関わる大人の影響は大きい。従って我々養成校は、人間性豊かな幼児教育者の育成が求められている。しかしこのことは、幼児教育者を育成している我々自身に、人間的豊かさ、或いは人間性が問われていることに他ならない

と、今回改めて考えさせられた。

3. クラス編成に伴う違い

クラス編成上特徴的なことは、男子学生の人数構成である。男子学生を受け入れて以来、現2年生を除いて、男子学生は必ずBCクラスに配属されている（現2年生のBCクラスは女子クラス）。BCクラスは、実技系科目のみ編成されるクラスで、講義系科目の際はそれぞれABクラス、CDクラスに分かれることになる。他クラスに比べ共に過ごす時間が限られているため、交流を深めるには不利な条件にある。従って、ある意味当然のことかもしれないが、昨年度はBCクラスによそよそしい雰囲気を感じた。個々人や仲良しグループには見られない、所謂女子クラスの雰囲気があったのだ。今年度は男子学生数の問題から、D2クラスのみ女子クラスという編成になったが、他クラスとの違いは感じられなかった。このことから、時間割上、合同、分離を繰り返すBCクラスは、男子学生がクラス間交流の繋ぎの役割を果たす可能性があることが考えられる。男子学生は人数が非常に少ないため、特殊なケースを除いては、普段からクラスを超えて交流しているからである。今後男子学生数がどのように推移するかはわからないが、各クラス均等ににならない場合には、このことを検討材料にして頂きたい。

次に、今年度初めてBCクラス、そして入試の段階で、特技がダンスであることをエントリーしていた学生を担当したことを振り返る。Bクラス（筆者担当セミナー）20人中4人が該当学生であるが、特技が同じジャンルとはいえ、性格上の違いから、この4人が特別仲が良いわけではない。し

かし、4人の特技を活かすことを考え、セミナー活動の一環として、「ヤマサ夏祭りダンスコンテスト」に出場することを提案した。出場者数に制限があったため、希望者8名がコンテストに出場し、残りのメンバーでセミナーTシャツやグッズを作成し、全員で応援に出かけることに決まった。『入門セミナー』の授業時間は当然使えなかったが、運良く空きコマがあったため、その時間をセミナー活動の時間に当てた。このことがクラスに与えた影響については明らかでないが、セミナーTシャツは他クラスに影響を与えた。実技の授業でこのシャツを見ているCクラスが、学園祭前にセミナーTシャツを作成したことである。セミナーTシャツを作成することが良いことであるとは思わないが、少なくともセミナーへの帰属意識は感じる。今年度、交流を深める上で不利なBCクラスが、実技やグループ活動で一番盛り上がるクラスであるのは、たまたま物怖じしない性格の学生が多かったのかもしれないが、帰属意識が関わっている可能性が高いと推察される。

先日、BCクラスの学生に、何故今年のBCクラスは仲が良いのかを質問したところ、「担任が仲が良いから」という、冗談か本気かわからない答えが返ってきた。前述した担任の影響については認識が浅いため、更に考えさせられた。

4. まとめ

『入門セミナー』の授業内容については統一されており、打ち合わせ等を通じて共通認識を持つ努力はしているが、担当者が6人であるため、他セミナーと同レベルの授業を展開できているのか、自分自身、不

安や疑問が残る。お互いの授業見学、担当者以外のチェック等のFDを導入しなければ、このことは明らかにすることができないと思われる。今回は、自分が担当者の一員であることもあり、授業内容についての分析はできていない。しかし、『入門セミナー』導入時に感じたHR的役割については、担当者になって一層強く感じた。そのような理由から、今回は、『入門セミナー』という授業を通じてのセミナー運営とも言うべき、二次的効果に終始してしまった。

大学において、HR的セミナー運営が必要か否かに関しては、各論あろうかと思う。社会人としての自立を妨げてはならないからだ。しかし、学生は年々幼くなっており、入学当初は高校4年生と言っても過言でない。従って、今後、益々入門期教育にはセミナー運営的要素が必要とされるところ。そして、早期に帰属する基地を提供すれば、後はそこから各々自由に飛び立つことができるのではないだろうか。

(文責 岡本)

推薦図書（2003年度岡本担当セミナー）

タイトル	著者	出版社
五体不満足	乙武洋匡	講談社
‘It’ と呼ばれた子	デイヴ・ペルサー	青山出版社
双子の星	宮澤健治	くもん出版
あかちゃんのゆりかご	ボンド・レベッカ	偕成社
ビルマの豎琴	竹山道雄	新潮社
ぼくはゾウだ	五味太郎	福音館
ミドリちゃんとよっつの毛糸	おおしまたえこ	ポプラ社
少年H	妹尾河童	新潮社
夏の庭～ The Friends ～	湯本香樹実	徳間書店
だからあなたも生きぬいて	大平光代	講談社
種まく子供たち ～小児ガンを体験した七人の物語～	佐藤律子 編	ポプラ社
かわいそうなゾウ	土家由岐雄	金の星社
The Book of Question	—	ディスクヴァー・トゥエンティワン
まあちゃんと長い髪	たかどのほうこ	福音館書店
届かなかった贈り物	有村英明	経済界
ハッピーバースデー ～命輝く瞬間～	青木和雄	金の星社
ドラゴンヘッド	望月峯太郎	講談社
Deep Love	Yoshi	スターツ出版
私と小鳥と鈴と	金子みすゞ	音楽之友社
十七歳	井上路望	ポプラ社
世界がもし百人の村だったら	池田香代子 訳	マガジンハウス

推薦図書（2004年度岡本担当セミナー）

タイトル	著者	出版社
電池が切れるまで ～子ども病院からのメッセージ～	すずらんの会	角川書店
夢追いかけて（2名が推薦）	河合純一	ひくまの出版
世界の中心で愛をさけぶ	片山恭一	小学館
子どもが育つ魔法の言葉	ドロシー・ロー・ノルト	PHP 研究所
ひめゆりの塔をめぐる人々の手記	中曽根政善	角川書店
Deep Love ～あゆの物語～（2名が推薦）	Yoshi	スターツ出版
だからあなたも生きぬいて	大平光代	講談社
名探偵キャサリン・シリーズ	山村美沙	文藝春秋
ローラ、叫んでごらん	ダンブロジー	講談社
たったひとつのたからもの（2名が推薦）	加藤浩美	文藝春秋
‘It’ と呼ばれた子	デイヴ・ペルサー	ソニーマガジズ
涙が出るほどいい話 第七集	「小さな親切」運動本部	河出書房新社
子どもが語る施設の暮らし2	石井昭男	明石書店
こうちゃん	須賀敦子・酒井駒子	河出書房新社
サンタクロースってほんとにいるの？	てるおかいっこ	福音館書店
ブー横丁にたった家	A. A. ミルン	岩波書店
アレクサンダとぜんまいねずみ	レオ・レオニ	好学社

推薦図書（2003年度青嶋担当セミナー）

タイトル	著者	出版社
はなたれこぞうさま	松谷みよ子	講談社
とべないホテル	小沢照巳	ハート出版
ハッピーバースデー ～命輝く瞬間～	青木和雄	金の星社
利家とまつ	竹山 洋	NHK出版
Papa Told Me	榛野なな恵	講談社
ようちえんにいったともちゃんとこぐまくん	あまんきみこ	福音館書店
すぐそばに	田村みえ	学習研究社
いろいろへんないろのはじまり	アーノルド・ロペール	富山房
元気をだして	宇佐美百日子	DHP研究所
‘It’ と呼ばれた子（2名が推薦）	デイヴ・ペルサー	ソニーマガジンズ
盲導犬クイールの一生	石黒謙吾	文藝春秋
天の瞳	灰谷健次郎	角川書店
ティナと大きなくま	ウテクラウス	徳間書店
はらぺこあおむし	エリック・カール	偕成社
遠い海からきたCOO	景山民夫	角川書店
たいのおかしら	さくらももこ	集英社
LOVE BOOK	広瀬裕子	PHP研究所
だからあなたも生きぬいて	大平光代	講談社
天空の城ラピュタ	————	徳間書店

推薦図書（2004年度青嶋担当セミナー）

タイトル	著者	出版社
三びきのかわいいオオカミ	トリビサス&オクセンバリー	富山房
ぼくのみいちゃん	田畑智美	新風舎
十二支のおはなし	内田麟太郎	岩崎書店
‘It’ と呼ばれた子	デイヴ・ペルサー	ソニーマガジンズ
あなたは一人じゃない	大平光代	光文社
ノントンおねしょでしょん	大友康匠・幸子	偕成社
シーラという子	トリイ・ヘイデン	早川書店
指環物語	トールキン	評論社
くまどんときつねどん	さくらももこ	PHP研究所
さっちゃんのまほうのて	田畑誠一	偕成社
100万回生きたねこ（2人が推薦）	佐野洋子	講談社
まほうのあめだま	安房直子	佼成出版社
おばけのアッチのおばけカレー	すみのえいこ	ポプラ社
はなのみち	岡 信子	岩崎書店
ベルナのしっぽ	郡司ななえ	角川文庫
ぐりとぐら	なかがわりえこ・おおむらゆりこ	福音館書店
ありときりぎりす	イソップ	講談社
十二番目の天使	オグ・マンティーン	求龍堂
つきのぼうや	オルセン	福音館書店
アトピーはお母さんしか治せない	大園千恵子	イーストプレス
イラクに主権委譲（新聞記事より）		